令和4年度
推薦入学試験問題　　**【情報学群　知識情報・図書館学類】**

区　　分	
小論文	問題１ 問１ ＜出題意図＞ 論理的思考力、理解力、表現力を見る。 ＜解答例１＞ 《仕事・余暇両立》を選択した人の割合は主に生年によって大きく異なり、調査が実施された年にはあまり影響を受けていないことが読み取れる。この結果からは、仕事と余暇のバランスについての考え方は、成人するまでの社会状況や経済状況に影響を受けるが、その後の社会状況や経済状況には左右されにくいと考えられる。（１４８字） ＜解答例２＞ １８年の調査では７９年から９３年に生まれた人は、１８年以前の調査と比べて《仕事・余暇両立》を選択した人の割合が低い。一方で、他の年代に生まれた人には同様の傾向がみられない。このことから、７９年から９３年に生まれた人に限って、仕事と余暇のバランスについての考え方が社会状況や経済状況には左右されていると考えられる。（１５６字） 問２ ＜出題意図＞ 論理的思考力、理解力、表現力、発想力を見る。 ＜解答例＞ 雇用環境の悪化や少子高齢化などにともなって余暇が必要となり、仕事絶対という姿勢を保つことが難しい社会状況となってきている。例えば、１９年に施行された働き方改革によって、過労死や過労自殺の増加に歯止めをかけるため、時間外労働に上限を設けるとともに、有給休暇を必ず取得させることが企業に義務付けられた。このような政府主導の取り組みによって余暇時間が増えることで、余暇を重視する人が増加することが予想される。また、共働き世帯の増加や少子高齢化にともない、多くの労働者が介護や育児などを仕事と両立させる必要が出てきている。このことも、仕事絶対という立場を主張する人が減少する一因となると考えられる。上記のような社会情勢から、今後１０年間で「仕事志向」型の人は減少し、「余暇志向」型の人が増えるのではないかと考えられる。（３５５字）

問３

＜出題意図＞
論理的思考力、理解力を見る。

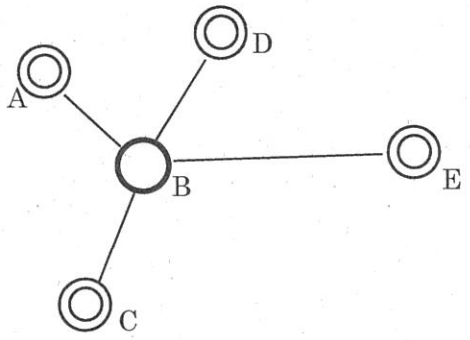
＜解答例＞
「余暇志向」型の女性の割合は １０ ＋ ３２ ＝ ４２％、
「余暇志向」型の女性の人数は ０．４２ × ６４，０００，０００人、
「余暇志向」型の男性の割合は ８ ＋ ２４ ＝ ３２％、
「余暇志向」型の男性の人数は ０．３２ × ６２，０００，０００人、
である。上記より、「余暇志向」型の男性の人数に対する女性の人数は、
（０．４２ × ６４，０００，０００）÷（０．３２ × ６２，０００，０００）＝ １．３５４… ≒ １．３５倍であることが推測される。

問題２

問１

＜出題意図＞
論理的思考力、理解力を見る。

＜解答例＞



問２

＜出題意図＞
理解力を見る。

＜解答例＞
１．　夫や妻、パートナー以外の親密な友人は何人いますか。
２．　親密な友人のうち、現在、一緒に働いている人は何人いますか。
３．　親密な友人のうち、現在、近所に住んでいる人は何人いますか。

	問３ ＜出題意図＞ 論理的思考力、理解力、表現力を見る。 ＜解答例＞ 姓の種類数が少ない場合には、同一の姓をもつ知人が多くなることが予想される。この場合には、手がかりなしに知人を思い出す状況と近くなってしまい、問題文中で取り上げられていた「多くの人は自分の知り合いを列挙するのが難しい」という問題が生じてしまう。（１２１字） 問４ ＜出題意図＞ 論理的思考力、理解力を見る。 ＜解答例＞ ３００，０００種類の姓から３，７５０種類をランダムに抽出したため、リストには１／８０の姓が含まれている。調査で得られた平均の知人数は４．２５人であるため、実際の知人数は１／８０の逆数である８０をかけ、４．２５ × ８０ ＝ ３４０人である。